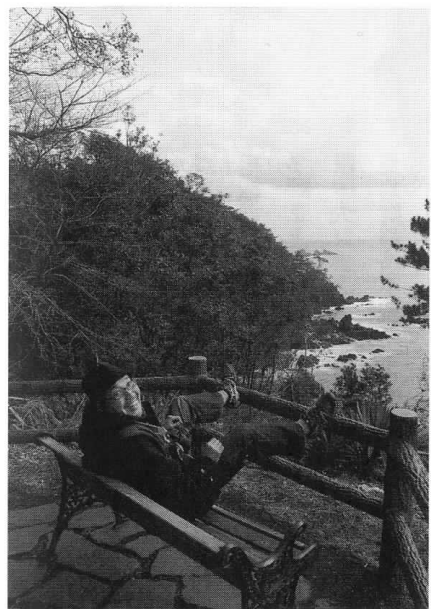


Book Guide



久住昌之のこんどは山かい!? 関東編 久住昌之=文、和泉晴紀=画

奥多摩のむかし道ではヤマメの刺身で一杯、埼玉（比企丘陵）の官ノ倉山ではクサリ場を初めて体験し濃密ホルモン店へ。伊豆大島の三原山では火口の迫力に驚き珍しい島料理に堪能し、締め「磯焼めし」のうまかったこと！。帯に謳う。〈軽い山、下りたら温泉、地元の居酒屋！これが楽しくないわけない。これぞおじさんの遊園地「登山!!」〉。房総の鋸山の帰りには、「かぢや旅館」で立ち寄り湯し、ラーメンと定食の店「さすけ食堂」へ。隊長曰く。〈このアジフライが絶品だ…。酒もススム。副長はアジフライのおかわりまで頼むではないか。著者がマンガ家であることを知った女店主はさりげなく、〈ついで、さっきまで、その席にマンガ家の白土三平先生が座ってたのよ〉。白土が「カムイ伝」を連載するために創刊したマンガ雑誌『ガロ』で著者はデビューしたのだ。コース案内と地元グルメファイルは重宝だ。



「中川一政美術館」バス停からふらふら歩くと絶景のポイントに出た(真鶴半島・魚つき保安林)

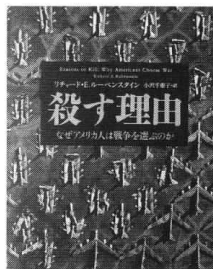
B6判／191頁／1200円
山と溪谷社

殺す理由

なぜアメリカ人は戦争を選ぶのか

リチャードE・ルーベンスティン著
小沢千重子訳

1831年、フランスの貴族トクヴィルはアメリカを訪れ、そのときの経験を『アメリカのデモクラシー』という一冊に著し、アメリカ人を「平和愛好者」と評した。だが、現代のアメリカは、戦争が絶え間なく続く通常の活動のようになっていく。本書は、この戦争軍事介入について考察し、国民を戦争支持に向かわせる修辭的・哲学的計略を検証し、その源泉をアメリカ文化のなかに探る労作である。結論から言うと、戦争が道徳的に正当化されると納得したときに戦争を選ぶことを繰り返しており、道徳的に正しいか否かの判断にはアメリカの市民宗教が大きな影響を与えていると分析している。



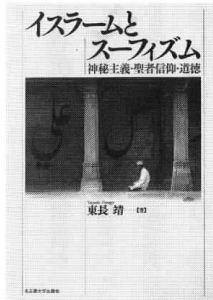
B6判／352頁／2500円
紀伊國屋書店

イスラームとスーフィズム

神秘主義・聖者信仰・道徳

東長 靖著

書名にある「スーフィズム」とは、行為と信仰という二つの価値体系から成り立つイスラームの後者の中核にあるものとされ、従来は「イスラーム神秘主義」と訳され、これまでは知的エリート層の思索の対象とされてきた。京都大学でイスラーム研究を行う著者は、このスーフィズムの成立を辿り、スーフィズムを知的エリートの思索的営為から民衆の聖者願望までも統合したものとしてみえ、道徳、神秘主義といった軸で眺めると理解しやすくなることを示すとともに、神秘主義という軸を拡張していこうとすれば、スーフィズムはイスラームの所有から人類の所有に代わることになるだろうと説く。



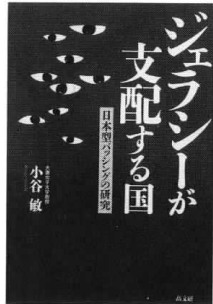
A5判／304頁／5600円
名古屋大学出版会

ジェラシーが支配する国

日本型バッシングの研究

小谷 敏著

ジェラシーは人間として自然な感情だが、一国の方向性がジェラシーによって決まってしまうのは異常である。本書は、日本社会に吹き荒れるバッシング、ジェラシーが支配し、弱い者いじめを煽動する権力者が英雄視される構造を解き明かし、支配からの脱却を説く。ここでは、1972年に起きた連合赤軍事件と外務省沖縄機密文書漏洩事件を起点に「世間」や「空気」が突出した事例として、松本サリン事件、イラク人質事件、嫌中嫌韓、光市母子殺害事件、弁護団へのバッシング、小泉や橋本の政治手法を取り上げ、日本社会特有の精神構造のあり方を問い、空気や世間に抗った人びとを描き出す。



B6判／285頁／1900円
高文研

サウジアラビアでマッシュアラー!

嫁いでみたアラブの国の不思議体験

ファーティマ松本著

サウジアラビアに暮らす日本人女性による国際結婚エッセイ。著者は埼玉県出身、留学先のアメリカで出会ったサウジアラビア人の男性と6年越しの恋を実らせて結婚、サウジアラビアに18年住むなかで、7人の子どもを育てた。イスラム圏ならではの風習と価値観、砂漠の町の暮らし、移民大国の素顔、ヘルシーなアラビア料理、不思議だらけの学校生活など、カルチャーギャップの戸惑いや驚きの連続のなかで、結婚生活が綴られる。イスラム教は日本人に向いているのでは、との感想も納得。「マッシュアラー!」とはアラビア語の日常会話で「いいね」「すごいね」の意味で使われるとのこと。



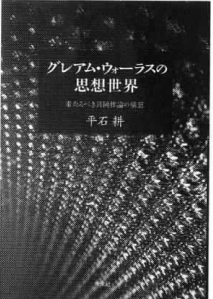
B6判／239頁／1600円
ころから

グレアム・ウォーラスの思想世界

来たるべき共同体論の構想

平石 耕著

英国の政治学者グレアム・ウォーラスの思想を、1880年代から1930年代の英国における政治史・経済史・思想的分脈のなかで読み解く試み。著者は、ウォーラスがアカデミックな世界のみならず現実政治にも深く関わり、その思想的営為は政治学という学問領域を超えて拡がりを持っていったことを評価軸として、初期ウォーラス思想の検討から後期まで一貫して見られる思考枠組みの特色を探る。初期の社会主義論、英国史研究と歴史認識、フェビアン協会との関係を展開しながら、19世紀的パラダイムから現代世界を照射する「世界的協同」の構想というウォーラス思想の根源を掘り下げる。



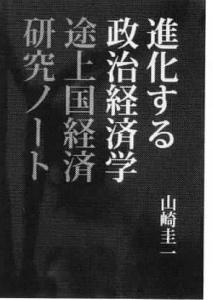
A5判／379頁／5800円
未来社

進化する政治経済学

途上国経済研究ノート

山崎圭一著

〈これからの経済学の実践において最も重要な問いは、経済学者の研究動機にかかわっている。つまり、なぜある方向に経済学を進展させたいのか、そして、なぜそのような経済学がこれからの世界で必要か〉政治経済学(途上国国家論や主流派経済学の成果を取り入れ、途上国経済の内部構造や動態への政治経済学のアプローチを通じてその意味を説く。ここではまず、理論編として経済学理論の基礎から途上国開発の諸理論を概観、途上国経済社会の実態を明らかにして、政策論として住宅政策からODAや外国人労働者政策を提起、政治経済学の未来を提示する。



A5判／382頁／2500円
レイライン

